

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③②

宗教的な光明

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第79回と80回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第79回では「七宝樹」について、第80回では「道場樹」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第77回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 本当のいのち

本願の第十二願、第十三願が「光明無量の願」、「寿命無量の願」と言われていますが、無量寿仏と無量光仏とは一体なのです。本当は別の願ではなくて、無量寿仏と無量光仏とは、大きなはたらきの二面を取り出した言葉だと言ってもよいわけです。光となつてはたらき、^{いのち}寿となつてはたらく。

寿となつてはたらくとはどういうことか、難しいことですが、本当のいのちを与えるというような意味で考えたらよいのだと思うのです。普通のわれわれの生命は因縁で生まれ、因縁で滅んでいく、^{しよしよう}因縁所生の命ですが、その因縁所生の命を生きているなかに、命それ自身とは何であるか、何のためにここに今の命が与えられてあるかという問いをもつときに、それはこの世の命の成り立ちを問題にしているのではなくるわけです。この世の普通の問いは、生まれたいうえで、どうしたらよいかというものです。どうやって稼ごうとか、今日は何を食べようとか。そういう生まれているうえでのいろいろなことではなくて、生まれるということが一体何なのだ。これは答えがないと言ってもよいわけです。答えがないような問いをもつ。人間の闇、人間の苦悩が、何でこんな自分がここに生きていなければならぬのだろうかという問いになる。

そういう問いに対して、本当に明るみが与えら

れ、本当に感謝しながら生きていける智慧が与えられる。それをいのちが与えられると表現するならば、無量寿仏の寿は本当のいのちを与えるのだと。本当のいのちと言うと、何か別の命がくるみたいなイメージですが、そういう意味ではない。今生きている命が暗い、闇のような命だとするならば、それが明るくなった。「ああ、明るいな」と喜んで生きていける智慧が与えられたときのいのちです。別の命になるわけではないけれども、新しいいのちが感じられる。このいのちは、いわゆる因縁で生まれ、因縁で滅ぶ命とは違う質のものです。

■ 悪業因縁を選ばず

この世の因縁は、友だちができたり、夫婦になつたりいろんな因縁がありますけれど、出会う因縁があつて出会うわけです。ところが阿弥陀如来は因縁を選ばない。どういう苦悩の状況であろうと、どういう悪業因縁に苦しむ場合であっても、それを選ばない。あらゆる衆生を救い逃がしたいと。

これはだんだん触れてくるととてもありがたいのですが、初めのうちはどういうわけか因縁が薄く感じるのです。宿業因縁が近いとありがたいということがあつて、例えば、病気をしていたときは薬師如来がありがたいとか、子どもさんを亡くした場合は地藏さんがありがたいとか、何か因縁が近いとありがたいわけです。ところが、阿弥陀如来は何がよいのか、何だかわけがわからない。別に病気に効く薬をくれるわけでもないですし、なぜありがたいのか。どんな苦悩であっても明るくしなければやまないということは、情況的苦悩を除く光ではないのです。ですから、出会う初めは、あまりありがたくないとか、あつてもなくても同じじゃないの、という感じを受けるのです。それがじわっと効いてくる。譬喩的に言えば、空気のようなありがたさと言うか、空気がないなどということは考えられない。あるからこ

そ生きていられる。そういう気づきが起こってくると、どれだけ深い闇に苦しもうと、それを思い起こすと阿弥陀の光が射してくる。そういう意味で阿弥陀の光は、無量光、限りがない。限りがあったならば自分は覚りを開かない、つまり仏に成らないと誓っているのですから、限りはないのだと。

「もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たまつれば、みな休息することを得て、また苦悩なけん」（『真宗聖典』30～31頁、東本願寺出版部）。阿弥陀如来の光は、三塗、地獄・餓鬼・畜生のような苦悩の深い場所、悪業因縁でたすからない場所のところにあっても、この光明を見ることができる。そういう場所にあつてこの光明を見れば、みんな心が安まると。

■闇へ闇へ

阿弥陀の光がわれわれの苦悩の闇を本当に明るくするということは、なかなか体験的には、よくわからないのです。曾我量深先生は、われわれにとって闇が晴れるということは、法蔵菩薩と出遇うことだと教えてくださった。つまり、法蔵菩薩は一切衆生を救わずんばやまんと言つて、どのような苦悩の闇をも厭わない。苦悩の衆生となって、どんな苦悩も引き受けて歩もう、そういう願心ですから、自分が感じているつらさとか苦悩はこの願心のむしろエネルギーになるのだと。だから曾我先生は、凡夫は明るみを求めるけれど、法蔵菩薩はむしろ闇へ闇へなのだ。闇こそ我がはたらく場所だと言つてそこへ入ってくださる。そういう場所をわれわれは生きていたかと思つたらかたじけないではないかと。私個人では嫌でしかたがない。けれども法蔵菩薩がはたらいてくださる場所なのだ。このように意味転換が起こるわけです。法蔵菩薩のお心は私のこの苦悩を晴らさんがためなのだ、法蔵菩薩を身近に感ずると、自分一人で苦悩を背負っていると思つて、逃げたい逃げたいと思つて逃げられなくて、つらくてたまらなかつた命の見方が変えられるということが起こるのです。そうすると、嫌だなどと思つていたのはもったいない根性だ。こういう命があつてこそ生きていく意味があるではないかと、そういう眼の転換をもたらすわけです。それが宗教的な光明、光という意味を持つのです。

われわれは物質的光明を求める。苦悩はなくなって明るくしてほしいと思う。でも、なくなってほしいと思えば思うほど闇は深い。われわれが光を求めても光などもらえない。けれど、闇を生

きてくださるものがあると教えられると、南無阿弥陀仏と共に明るみがあるのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年2月～2015年4月）一抄出—

■2015年

- 2/4 第151回清沢満之研究会
- 2/6 第10回研究員と読む公開輪読会「浄土教に求められた救い—『観無量寿経』を読む—」担当：中村玲太研究員①2/6②2/13③2/20④2/27（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/10 第79回（通算第130回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/13 ご命日のつどい
- 2/16 第171回英訳『教行信証』研究会
- 2/17 第22回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 2/25 第9回『西方指南抄』研究会
- 3/4 第172回英訳『教行信証』研究会
- 3/6 第173回英訳『教行信証』研究会「阿修羅の琴と大行—親鸞と大拙の理解をめぐる—」大谷大学専任講師：マイケル・コンウェイ氏（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/9 第80回（通算第131回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/12 第5回センター会議（親鸞仏教センター）
- 3/13 ご命日のつどい
第23回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 3/16 第1回清沢満之研究交流会（清沢満之研究の〈可能性〉—没後百周年から見えたもの—）「清沢満之の「復権」の試み」東京医療保健大学非常勤講師：山本伸裕氏、「天皇制国家と「精神主義」—清沢満之を中心に—」本願寺史料研究所研究員：近藤俊太郎氏、「清沢満之の〈発掘〉—『臘扇記』という一断面—」名和達宣研究員、「大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店）編纂の背景と課題」大谷大学短期大学部専任講師：西本祐攝氏、全体討議「異領域からの清沢研究が交わる場所」愛媛大学准教授：杉本耕一氏、田村晃徳囑託研究員（司会）（文京区・求道会館）
- 3/30 第10回『西方指南抄』研究会
- 3/31 第152回清沢満之研究会
- 4/1 人事発令（田村晃徳、大谷一郎、大澤絢子が囑託研究員として再任）
- 4/6 第24回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 4/7 第49回現代と親鸞の研究会「終末期ケアにおける宗教の役割—死にゆく人はさびしいか—」社会学者：上野千鶴子氏（文京区・東京ガーデンパレス）
- 4/10 ご命日のつどい
- 4/14 第12回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「自己組織する地球の〈いのち〉—人間の死生観を越えて—」NPO法人「場の研究所」所長：清水博氏、「共に大悲の「場」を生きる」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/22 第153回清沢満之研究会
- 4/27 第11回『西方指南抄』研究会
- 4/28 第174回英訳『教行信証』研究会

掲載論文

- 4月 『場所』第14号（西田哲学研究会）
名和研究員「西田幾多郎と浩々洞—「宗教論」の成立背景—」